研究所だより

モニター会議概要

現地モニター（敬称略・五十音順）

- 美瑛町　内田達也（JAびえい青果課）
- 天塩町　宇野剛司（酪農経営）
- 新篠津村　大塚早苗（有機野菜・畑作・稲作経営）
- 美唄市　貞広樹良（稲作・畑作経営）
- 京極町　髙木智美（畑作経営）
- 音更町　津島朗（畑作経営）
- 名寄市　中野康則（稲作・野菜経営）

一般社団法人　北海道地域農業研究所

- 副理事長・所長　坂下明彦
- 専務理事　近藤好弘

当研究所では、現地の実態を的確に把握し業務推進に活かすため、新進気鋭の農業者に現地モニターを委嘱し、さまざまなご意見をうかがう場を設けています。

本年度は、令和三年十一月一七日にコロナウイルス感染予防のためリモートでの意見交換を行いました。以下その概要を紹介いたします。

近藤　本日は大変お忙しい中、モニター会議にご出席をいただきありがとうございます。今回のモニター会議は一〇回目の開催となります。これまでもモニター委員の皆様方からは経営の状況や地域の状況、これからの課題・展望などいろいろご意見を頂戴し、私どもの研究業務に活かさせていただいています。本日は皆さんの営農の中での課題、そして今後考えておられること等を中心にご意見、声を聞かせていただき、当研究所会報の『地域と農業』で広く紹介させていただきたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。今後の進行につきましては坂下所長にお願いします。

近藤専務

坂　下　本日の内容ですが、初めにそれぞれの経営についての今年の様子や新しいチャレンジについて伺い、次に二年目になったコロナに対して、農村ではどのような状況となっているかをお伺いします。それではまず今年の営農について、名寄の中野さんからお願いします。

中　野　私はもち米を一〇haとミニトマトを二反半ほど作っています。もち米は今年の天候のお陰で一〇俵以上取れましたが、ミニトマトは夏の高温で花芽が落ち、九月上旬頃の収穫量が激減してしまいました。今年はもち米のプラスとミニトマトのマイナスで、去年と比べてプラマイゼロかなという感じです。

例年ミニトマトでジュースを作り、東京に売りに行っていましたが、去年も試飲販売や直接販売ができず、今年も緊急事態宣言は解除されても試飲・試食販売は自粛しているらしく、道外への対面販売は断念しています。そのせいで売上が大分下がってしまっている状況です。

また、観光協会とも協力して、コロナ前まではインバウンドの人や農業体験したい人を受け入れていましたが、去年と同様今年もそういう人たちがなかなか来られなくて、ちょっと苦戦しています。

坂　下　中野さんは茅ケ崎から移られてきて、東京の方にも知り合いがおられるということですが、このコロナ禍でそういう友達関係などはどういう影響を受けていますか。

中　野　私は農業を始める前は飲食関係の卸会社にいたので、飲食関係の知り合いが大勢います。コロナのせいで飲食を辞められた方もいますし、売上が下がってしまい、借入をして返す目途が立たず大変な思いをしているという話も聞いています。私たちも農産物を作っていますが、飲食、業務用食材として提供できないとなると、これから本当に消費が戻ってくるのかは不透明な部分があります。

坂　下　ありがとうございます。続きまして天塩の宇野さん、お願いします。

宇　野　今年は干ばつがひどかったです。天塩も七月から八月にかけて一ヵ月半くらい雨が全く降らなく、畑の草が皆枯れてしまいました。こんなことは多分僕が生まれてから初めてです。春先の干ばつは今までも何回かありましたが、夏にこうなるとは今まででは考えられません。留萌管内でも小平町の気温が道内一高いとラジオで何度も言っていましたし、本当に今年は異常な気候でした。

春先の一番牧草は、それほど問題なく充分収穫できて、乾草も好天だったので良いものができましたが、二番牧草はほぼ全滅に近い状態でした。デントコーンも悲惨な状態で、ほぼ伸びない。伸びていても茎がすごく細く、赤くなって食べられる状態ではない。そのため刈り捨て

ているようなところもけっこうありました。普段水が溜まってしまうような水はけの悪い草地の方がある程度育ち、逆に普段水はけが良くて収量も期待できるような草地はほぼ全滅でした。それくらい干ばつがひどかったです。

宇野剛司さん

自社についてですが、去年からチーズ工場を作る計画を立てていたのが、今年になりやっと動き出しています。でもコロナの影響で資材納入が遅れています。機械はいろいろな国のものを買っており、ハンガリーのものはもうすぐ届く予定ですが、フランスのものは船がいつ出るのかもわからない状況です。予定より大分遅れて、来年の春先くらいにようやく出来上がるかなと思います。資金繰りの面ではひと手間かかるかなと思っています。

それと、今年から試験的にオーガニックのグラスフェッドビーフを商品化しようとしています。僕も年を取ったせいか和牛の脂が体に合わなくなってきており、自分でも美味しく食べられる赤身の肉を作りたいと思いました。前々から遊びで何頭かは肥育していたので、それを屠畜して今年から試しに出している段階です。前にコープさっぽろさんの「畑でレストラン」で、六歳か七歳の経産牛を屠畜したものを、そのままでは間違いなく固いだろうということで、一ヵ月くらいドライエイジングして提供しました。ランプとリブロースだったと思いますが、ドライエイジングをやったおかげで赤身にしてはかなり柔らかい感じになり、餌が草だけだったからか、お客さんからも「牛臭さがない」、「もともと牛肉はあまり好きではなかったけれど、これは普通の牛肉と違って美味しく食べられた」という好意的な反応をいただきました。ウェットエイジングにするかドライエイジングにするかとか、今回は一ヵ月しか熟成していないけれど次はもっと長くしてみるとか、餌と熟成の違いの部分を今後いろいろ試してみようと思っています。海外では一二〇日熟成というのもあってかなり高額なようですが、このあたりをいろいろ試してみると面白い肉ができるのではないかと思っています。牛もうちにはホルスタイン、ブラウンスイス、ジャージーがいるので、いろいろ取り組んでいるところです。

あとは、今年の春に新しい会社を作りました。去年もお話したと思いますが、ドローンとAIを使って草地の状況を判断してスマート酪農をやるという話があり、その最終的なシステム開発を別会社でやるということで取り組んでいます。その会社では今、離農したいという空知の酪農家さんと土地を交渉中で、そこに新しい牧場を作り、眺めが良いところな

のでシステム開発の場だけでなく、観光もできる牧場にしたいと考えています。土地の話が決まれば、来年度には生乳生産と乳製品加工、それから飲食のできるスペースに宿泊施設もあるような牧場を作りたいと考えています。以前、ＪＲＡの元調教師で、引退した競争馬が行き場がなく年間三、〇〇〇頭以上も殺処分されているのを助けたいという活動をされている方との出会いがありまして、その馬たちも預かって余生を過ごせる場所を提供し、乗馬やちょっとした観光ができるような形にできないかと思っています。その空知の土地は草地が一二〇haあり、うちにも二三〇haくらい草地があるので、うちの方でも引き取って馬たちに余生を過ごさせてあげられればと思い、今計画を進めています。

坂　下　なかなか意欲的なお話を伺いました。最近は草地に木を残しておらず、今年のように一ヵ月半もカンカン照りになると放牧も大変かなと思います。こういうことがあった時こそ、牧場全体のデザインを考え直すきっかけになるのかなとも思いますが、その辺りはいかがでしょうか？

宇　野　今年の夏場はあまりにも暑かったので、牛も基本的に昼間はほとんど草を食べられません。それで、日中は牛を樹木とか日陰になるところがある草地に出し、夕方からは食べられる草のある草地に出してという、干ばつ時限定の管理をしてしのぎました。

坂　下　ありがとうございました。では次に美唄の貞広さんお願いします。

貞　広　今年の美唄は大雪に見舞われてうちの農業倉庫が潰れてしまい、知り合いの所でも何棟も被害があり、さらに農協の倉庫も潰れてという状況で、まずその片付けが大変なスタートになりました。

　農業の方は、今年の作付けは米が二八haと麦、ソバ、大豆、菜種で三〇haくらい作っていますが、雪が多かった割には春先の雪解けも早く、作業自体はそれほど遅れずスタートできました。やはり水不足と夏の高温の影響がけっこうありまして、大豆の発芽が悪く、収量に影響するくらいでした。あとはトウモロコシが水不足のため小ぶりなものしか取れなかったという状況です。米とサツマイモは収量も品質も今までにないほどよかったと思いますが、米価が非常に安いので最終的な収支はマイナスになるのではないかと思っています。

　去年同様、修学旅行生の受入は全く来ない状況が続き、やっと一〇月に一校だけ京都から来てくれました。今までは農家に泊まってもらいましたが、今回はホテル泊で、農業体験のみ農家でということで対応しています。コロナも大分落ち着いてきているので、今後修学旅行の需

要は少しずつ戻ってくるのではないかと思っています。

私の所では消費者を呼んで味噌作り体験を毎年やっていますが、コロナが始まってからは体験はやめて、うちで作ったものの販売だけにしました。やはり米とか味噌とか、家庭で消費されるものについては順調に販売できているかなと思います。

坂　下　味噌作りは工場のような形で大規模にやっているのでしょうか。

貞　広　加工場ですが、それほど広くはありません。例年だと一〇人くらいの消費者と、味噌を詰める体験などをやっていました。

坂　下　ありがとうございました。次はＪＡびえいの内田さんお願いします。

内　田　やはり皆さん同様高温・干ばつの影響がありました。宇野さんのお話にもありましたが、道北はかなり酷くて、美瑛でも大分被害がありました。特にブロッコリーとスイートコーンは収穫を一部断念した圃場もあり、生産者はけっこう苦労していたと思います。品質面で言いますと、トマトは夏場での量はありましたが、軟化玉・裂果玉など例年に比べ廃棄しなければならないものも多く、厳しい販売環境でした。また、ブロッコリーも変形や黄変等が見受けられ、スイートコーンは貞広さんも仰っていた通り、俵が小さく、不稔のものが多く見受けられました。

内田達也さん

バレイショについても干ばつの影響もあり、急に盆明けに雨が降ったせいで二次成長が多く、また発芽が早くて、品質面ではかなりダメージが大きく市場からもクレームも多いという状況でした。農産では米も小麦もまずまずの出来で、ビートは一部焼けあがった圃場もありますが、収量はよかったのではと思います。コロナよりも、高温・干ばつで苦労した一年でした。

坂　下　ありがとうございます。次に京極の高木さんお願いします。

高　木　やはり皆さんと同じように、干ばつの影響が避けられなかった一年だったと思います。けれど今年は農産物の味はすごく良かったです。凝縮されたようなというか、男爵も身が締まっていて美味しいし、ブロッコリーも味が濃い。ただし、収量については、バレイショは小さかったので、あまりありませんでした。ニンジンは収量は悪くなかったのですが、十勝やオホーツクの豊作で、市場価格が

下がっている状態でした。小麦は質も量もそこそこよかったと思います。小豆は赤いのと白いのを作っていますが、赤い方は今年も観光がだめで人の動きがないこともあり在庫が掃けず、価格が上がらない。白い小豆はやっと今日出荷できました。白い方は作っている人も少ないので買い手はつき、価格的には安定しています。来年は白い小豆の作付面積が赤い小豆をついに逆転してしまう予定です。

農業女性のグループで企業とのコラボがあり、いろいろな農作物を持ち寄って加工品を製造・販売する試みをしました。こういう取り組みはやり甲斐か労働対価かどちらかだなと思っているのですが、今回はやり甲斐の方だったなと

髙木智美さん

（笑）。そういうことのまとめ役として動いた一年でした。

それと、チャレンジ的にはまだまだなのですが、自分のところの畑を農地転換して個人的にキャンプ場をやりたいと考えています。川も近いという立地条件と、羊蹄山の景色が最高にいいところなんです。街灯がないので、星空が本当に綺麗です。今キャンプブームだからというわけではないですけれど、やはり、人を呼ばないと地域にお金が回らない。地域に一番お金を落とせるのは人を呼ぶことだと思っていて、そういう面でも良いかなと。実現するかはわからないけれど見積りくらいは出したいと思っていて、皆の加工品なんかもそこで売れたらいいなとか、そういうことを考えてこの冬は過ごそうと思っています。

坂　下　ありがとうございました。では新篠津の大塚さんお願いします。

大　塚　うちは昨年農福連携の認定をもらい、その補助事業でハウスを九棟増やしました。もともと七五ｍのハウスが五〇棟あったところが五九棟になったので、株数もミニトマトだけで三万株くらいまで増えました。私としては収穫しきれるのか、売りきれるのかということが少し心配なシーズン入りでした。農福連携であり、福祉事業所の方たちが毎日来て農作業をしてくれます。四～五ヵ所くらいの福祉事業所の方たちが、一チーム五人くらいで来てくれて、ミニトマトの収穫やハウス内の草取りをしてもらい、今の時期であれば切り干し大根の袋詰めだとかをやってもらっています。何年も前からやっていますが、今年は認定が取れたこともあり、いろいろなチームがたくさん来るようになりました。やってみると難しいこともやはりありました。例えば一番困ったのが福祉事業所の職員の方が代わってしまうことです。職員の方が代わると、障がい者の方のメンバーは

代わっていなくてもうまくいかないことが多く、うちのパートさんが代わった時と同じくらい大変です。うまく仕事の内容を皆に伝え、働いてもらえるようにすることに苦労しました。今年はすごく暑かったのでハウスの中はさらに暑く、遮光もやっていますが、ミニトマトの収穫をやってくれている事業所から、「もうこれ以上は無理です」とお断りされてしまったこともありました。「本当にシーズン終わりまで行けるのか?」と思ったりもしましたが、何とかやり切ったという状況です。

夏の暑さで花芽が落ちたというお話を先ほど中野さんも仰っていましたが、うちも九月上旬に一時ミニトマトが全然取れない時期がありました。その後復活しましたが、ハウスが九棟増えたにもかかわらず、最終的な収量は前年よりわずかしか増えませんでした。野菜は二二品目ほど作っていますので、良かった野菜、悪かった野菜といろいろありました。ニンジンは種をまいた後干ばつで全く発芽せず全滅でした。サツマイモは四町くらい作っていますが、収量も味も良くて、意外に干ばつに強いのかなと思いました。冬に干し芋の加工をやっていますので、サツマイモの収量が少ないと冬の仕事がなくなり困りますが、豊作だったので非常に助かりました。

外国人技能実習生が去年は入ってこられませんでしたが、今年は「パラレルノーカー」ということで、普通の会社員の方たちが休日を利用して畑を手伝いに来るものですが、土日にミニトマトの収穫などをやってもらいました。福祉事業所の方々は土日は休みなので、その分会社員の方々に来てもらい、何とか人のやりくりで乗り切ったようなシーズンでした。

坂　下　「パラレルノーカー」は、ＪＡ北海道中央会や農協がいろいろ宣伝していますが、そういう関係の方ですか。

大　塚　その紹介によるものではないですが、一般の会社員の方が直接お手伝いに来てくれたというものです。

坂　下　新しい動きですね。では音更の津島さんお願いします。

津　島　個人の経営の部分と地域の部分を少し混ぜて話したいと思います。畑の経営面積がジリジリ、ジリジリと周りを含め増えてきているので、どうしようかなと思っています。法人化も考えてはいるのですが、今のところ個人でやれているので、個人経営路線でどんなふうにやれるのか思案しています。たとえば、どうすれば極力労働時間が減らせるか。省力化できるものは省力化し、簡単に、楽にやるにはどうすればよいか。移植であったてん菜を五〇％直播にしてみるとか、主流にやっている加工用スイートコーンの収穫は委託収穫です。ニンジンはすでに農協での収穫であり、小麦も地域の

集団で共同収穫が柱です。あと大豆も三年前から大型コンバインを三軒で購入し、委託もやりながら共同でやっています。どちらかと言うと、機械投資をして、いかに人を使わないでやっていくかという流れに確実にシフトしてきたかなと思います。小麦の播種もパワーハローの後ろに麦のドリルを載せてコンビで播種するという形です。あとは肥料さえ撒いておけばいいので、畑には一人で行って撒いてきたという人も出てきました。一人でいろいろな作業をやり切るようなスタイルが徐々に出てきていると思います。

津島　朗さん

皆さんのお話にもありましたが音更も干ばつがひどくて、畑ごとに恐ろしいほどの反収の差が出ました。金時はほとんど全員が等外です。高温で花が落ちて二次成長が起き、まともなものがほとんどないという状態ですが、十勝全域に亘ってそんな状況でした。小豆は最低の人は一俵、最高の人が六俵ということで、同じ町内でも畑ごとにそこまで違う。バレイショも、反収が二〇俵の人から六〇俵の人までいる。大豆は概ね五俵から七俵といったところで豊作でした。てん菜は干ばつ被害で二次成長した人たちの出荷が完了していないので最終的な収量はまだですが、反当り一〇tの人もいるということで、十勝全体としては恐ろしい大豊作の数字が出そうです。

その中で、機械化していくという人と野菜にシフトしていくという人がそれぞれ増えてきています。後者だとネギ、ニンニク、サツマイモなどを始めたりしています。農協では、今はまだ試験的な段階ですが、加工用ブロッコリーの機械収穫に向けた機械の開発を始めました。また、コーングリッツはどうかなど、あちらこちらの先進的なところはいろいろ取り組んでいます。はっきりと国が「基幹作物はきちんと守る」と言ってくれればいいのですが、そうでもないので、あれこれと不確実なものに投資が進んでしまう可能性があると思っています。

坂　下　小豆は土壌の管理とか、基本的なところで差がついたのでしょうか。

津　島　今年については人や管理の差ではなかったです。やはり一か月半も雨が全く降らず、花の時期に三五～三七℃という高温も続いたので完全に花が落ち、その後の雨で二次成長してしまった。ひどい話ですが、まだ小豆の収穫が終わっていない人もいます。黒土が深く作土が良いところは高温の時にも全く影響を受けず、そういう畑の人は六～七俵という数字になりました。一番ひどかったのは石の多い焼ける地帯。二番目に粘土地帯。

農協との話の中でも、「個人的に大変な人がいるね」と言ったら、「いや個人じゃない。畑だ。完全に畑の差が出た。」と言われました。そういう恐ろしい年でした。地元の話の中では、先祖や親がどこに入植したかの違いで、先祖を恨むか感謝するかまで言われています。

坂　下　ありがとうございました。

今、一通りお話を伺いました。大変な年で、今年はさすがに良い話を聞けないのではないかとビクビクしていましたが、昨年からさらに進んでいる方や、夢を語られる方がおられて、大変心強く思いました。

地域農研でも「コロナ禍を契機とした新しい生活様式の構築－農村からの提言－」というテーマの自主研究も始めていて、これから三年ほど取り組む予定です。今は都市での生活がギリギリの所まで行ってしまい、生活を改善していくことが必要じゃないかと感じています。基本的に都市では職場と住まいが分かれていて、生活と労働が別々になっているわけです。それに対して農村は仕事と生活が、時間は分かれているけれども同じ場所、同じ枠の中でやられている。その農村の良いところを都市に対して何か発信できないかという思いがあります。

コロナに関して、例えば外国人技能実習生が来られないため別の形で労働力を確保しているとか、去年ともまた違う対応がいろいろ出てきていると思います。コロナ禍に関して何か思うところをもう一回りお話しいただければと思います。

ではまた中野さんからお願い致します。

中　野　私は新規就農して今年で二〇年あまりになり、土地の借金もあと九年くらいで終ります。これからについては規模拡大というよりも、東京の人との繋がりがあるので、それを活かした形で何かできないかと考えています。

今から三年くらい前にゲストハウスを建て、キャンピングトレーラーを三台買い、農業体験プラス何かができる場を作りました。なので、髙木さんの先ほどの「キャンプ場と観光」という話をすごく興味をもって聞いていました。コロナの前には「ワーケーションで受け入れ」という話もありましたが、コロナのせいで全部そういう話が吹っ飛んでしまいました。先ほど、「これからは新しい考え方で、農村の出番だ。」と坂下先生が仰っていたのはまさにその通りで、これからの一〇年間はもう少し農業体験などに力を入れて、農村の楽しいことを伝えていきたいと思っています。新規就農者として、東京の人達とのつながりの中で「農村は実はこうなんだ」という話ができると思うので、そういうことを伝えていきたいと考えています。非日常を味わうために農村に来て欲しいのです。ビジネスホテルでは非日常が断絶されてしまうからキャンピングトレーラーやゲストハウスを作ったりしました。東京から来る方

中野康則さん

は皆さん喜んでいただき、「また来たい」と言って下さいます。コロナで今はそういうことは大々的にできないのですが、アフターコロナに向けてそういう動きもしていきたい。将来的にはドッグランを作るなど、何か都会の人にも喜んでもらえそうなスタイルで都会の人たちを呼びたいと思っています。水稲のもみ播き・田植え仕事は人手のかかる大変な仕事でもあり、そういう時の人材確保という意味でも、自分が力になれれば良いなと考えています。

購入したキャンピングトレーラー三台の内一台は、エアストリームを買いました。それをキッチンカーにして、道産農産物で料理したものを東京のマルシェスペースや老人ホーム、イベントで提供し、私の視点での北海道のアピールを府県の人に発信するということを将来仕事にしたいと思っています。また、私のところにも将来的にはキャンピングカーの人を受け入れたいと思っています。今キャンピングカーがこれだけ普及しているにもかかわらず、キャンプ場しか受け入れ先がないとも聞いています。欧州では、郊外よりもむしろ街の中にキャンピングカーを停めて、そこで寝泊まりしつつ街の中に買物や食事に行くそうです。農業とは少し話が変わりますが、キャンピングカーがこれだけ普及してきたのだから、受け入れ先もそのように整備できないかという思いが私にもあります。その中で、農家には土地もあるので、キャンピングカーで回る人を受け入れて農作業を手伝ってもらうなどの新しいつながりができると面白いと思っています。キャンピングカーに乗っている人は、第一次産業に興味がある人も多いので、そういう人たちも呼び込めると思います。キャンピングカーで府県から来た人たちが、あちこちの農家に泊まれるようになり、ゴミやトイレの問題が解消できる農家さんマップなどができると、「なんだか面白いことをやっている」と人が集まるようになり、何か新しい価値のようなものができるんじゃないかと思います。

坂　下　ありがとうございます。実は私もキルギスから「ユルタ」という遊牧民の円形のテント、中国では「パオ」と言いますが、それを輸入して栗山の家の横に建てたのですが、皆が面白いと言ってくれています。キルギスの遊牧の文化を紹介したいと考えていますが、そういう「人が来られるような仕組みを作る」ことは面白いなと思っており、大変共感しました。

中　野　ただ東京の人からの提案を受

け入れるのではなく、東京から来る人が喜ぶようなことをこちらからどんどん提案するなり、こちらの農家の人も向こうへ行き、直接お客さんに伝えるという、都会と農村の相互交流が非常に大事かなと思っています。

坂　下　ありがとうございました。では宇野さんお願いします。

宇　野　やはりコロナの影響で、百貨店での販売はいまだに悪い状態が続いています。また、イートインでその場で飲み食いする人も、去年より減っているかなと思います。反面、商品を買い求める方はしっかりいるので、物販自体はそこまで落ち込むことはありませんでした。とにかくイートインが減ってしまったという印象が強いです。スーパーでの売上は増えています。個人店というより、全国のスーパーでのフェアもけっこう増えていますし、常設展もあるので、そちらへの卸売りは大分よくなったかなと思います。ネットは去年から変わらずよく売れています。でも、うちのカフェにはお客さんが全然来ません。ようやく緊急事態宣言が解除になり、少しずつ動きはありましたが、元どおりというにはほど遠い状態です。カフェには、まだまだあまり期待できないかなと思っています。

卸向けでは、ソフトクリーム原料が、キャンプ人気もあり、キャンプ場での販売需要としてすごくありました。反対に、今まで一番よく売れていた道の駅はあまり動きが良くなかったです。人の流れは、キャンプ場へということがよくわかりました。そのような状況で、うちの商品の売り上げは前年と比べても良くはないのかなと思います。

坂　下　ありがとうございました。では貞広さんお願いします。

貞　広　コロナに関しては、米価が下がると言われていたので、今年の作付けの中の米は、半分を飼料用米として生産しました。元に戻るまでには何年かかかると思いますので、しばらくは飼料用米を入れながらやっていかなければと思っています。

労働力の部分では、コロナとは直接関係はないですが、現在通年雇用で一人います。夏は少し手が足りないのですが、冬はそれほど仕事もなく、さらにもう一人増やすというのは難しい状況です。それでも、「北海道ベースボールリーグ」が二年目になり、地域球団の「美唄ブラックダイヤモンズ」の選手が四月から一〇月までの午前中のみ地域の企業で働くという仕組みになっており、うちもそこの選手一人

貞広樹良さん

に来てもらっています。今年は体格の良いキャッチャーの人が来てくれました。実家が長野県の米農家で、小さいころから仕事を手伝っていたということで作業にも慣れており、すごく助かりました。収穫が終わる秋まで来てもらっていたので、最後はうちの新米を実家に送り、実家の新米をうちがもらって食べ比べというか味見をさせてもらいました。自画自賛になってしまいますが、北海道米も府県米に肩を並べるようになったんだと実感できました。（笑）。

坂　下　ありがとうございました。では内田さんお願いします。

内　田　コロナに関しては、去年ほど意識せず青果物・農産物を売っていました。米は皆さんのお話のとおり安くなりましたが、僕が担当しているバレイショは、依然として飲食店・レストラン関係はダメージがあったものの、加工業界、特にチップ類は好調だったので、去年よりは落ち着いていたのかなと感じています。やはり、全道的な不作により物量がないので、一年通してバレイショを販売しますが、売る方も買う方も大変な一年になっており、来年の豊作に期待するしかありません。

坂　下　ありがとうございました。では高木さんお願いします。

高　木　先ほど坂下所長も言われましたが、農村からの発信ということですが、実際にイベントを開催すれば来場した人達がその良さを発信してくれることも期待できます。ですが、インターネットによるショッピング方式の場合、自分たちの農産物を買ってもらうために、皆さん方は、どんなことをどのように活用し発信しているのかが気になっていました。

私が、今年試してみたのはＦＭラジオの「ＡＩＲ-Ｇ」にメッセージをガンガン出すということでした。四月から毎日どこかの番組に一通はお便りを出しました。うちでは五勝手屋本舗さんとのコラボ商品で白小豆の最中を限定で売っていますが、それをＡＩＲ-Ｇに送って食べてもらって宣伝してもらう。またＡＩＲ-Ｇから電話がくれば直接良さを伝える。そういうことを続けてリスナー仲間もできました。一般消費者の方達の声ですが、「農業のよさ」であるとか「商品のよさ」は聞いてみるとすごくわかるけれども、その機会がなかなかないと言います。私もそれほど大きくやっている方ではないですし、ホームページも作っていませんが、ラジオという媒体を使ってうまく宣伝できたことが、今年一年試してみて面白かったです。けっこうリスナーには農家さんも多いことに気付きました。そこからまた、ほかの地域の情報も得ることができました。

坂　下　ありがとうございました。それでは大塚さんお願いします。

大　塚　観光や外食に関係のある取引先が少なかったので、あまり売上的には影響はありませんでした。今年はミニトマトをたくさん作ったとお話ししましたが、一一品種ほど、いろいろな形や色のものを作っています。コロナ前は、スーパーの店頭で「ミニトマトバイキング」というものがありましたが、それもコロナでなくなり、それに伴って全国的にカラーのミニトマトを作る農家が一気に減ってしまったそうです。でも、うちはずっと作っていたので、その引き合いがずいぶん多くなり、それをきっかけに道外の取引先もずごく増えるという良い面があったと思っています。

夏の間は、タイの国立大学からの留学生に四ヵ月間、四人くらい来てもらう予定でしたが、昨年はダメになりました。その方たち向けに用意した寮が空いたので、毎週末、金曜日の晩から北大生に泊まってもらい、土日に畑でアルバイトをして日曜の晩には帰るというように活用しています。うちは規格外野菜を札幌にある外国人交流センターに寄贈していますが、そこの外国人の方たちが寮に泊まり農作業を手伝ってもらうこともありました。先ほど「ワーケーション」のお話がありましたが、その寮は窓の外にリゾートホテルのような景色が広がっていますので、ワーケーションとして部屋を貸し出すということもありかなと考えています。

大塚早苗さん

コロナ関係では、いろいろなイベントが全てなくなってしまい、会議もほとんどがオンラインになりました。そういうわけで、「出かけて歩かないことがこれほど楽なのか」とちょっと思っています。もしかすると、このまま外食とか、ススキノにも人が戻らないのではないかとも思っており、そういう状況も見据えた上で、これからはやっていかなければならないのかなとも考えています。

また、米が安いということで、新篠津も稲作地帯なので米の収入減がけっこう深刻になっています。野菜への転換であるとかいろいろ話があります。でも、今まで米を作っていた農家が野菜を作り始めてしまうと、野菜が供給過多となり既存の野菜農家の経営を圧迫する懸念があるとも聞いています。ですから、米に変わる作物として何があるのかということも考えていかなくてはいけないと思っています。

坂　下　ありがとうございました。それでは続きまして津島さんお願いします。

津　島　コロナ禍になってから、地域全体のコミュニティ行事が一〇〇％なくなりました。農協の懇親会・会食も全てずっとゼロです。もともとそういうものが嫌いな人たちは「楽になった」と喜んではいますが、それもどうかなと思っています。昨日のＪＡ北海道大会の中で僕の耳に残ったものは、「人づくりをどうするか」、「対話によるもの」など、やはり人と人とのつながり方です。ネット等で情報を聞いても、それはただの情報で終わってしまいます。「人づくり」というのは対話により作られるものです。やはり実際に会わないと、雑談もなく、伝えきれないものが多々あり、早く元の対面する社会に戻らないとダメだなと気づきました。

しばらくの間は、仲間内での外食も行く行かないの葛藤があり、行っても何か悪いことをしているような気持ちになることもあったため、外には出向かず、時々ビートのハウスに集まり焼肉をやったりしていました。そんなこともあり、何かホームパーティーなどができるような、人が集まることのできるような家にし、皆で楽しくやることもいいなと気付きました。遠くからたまたま友人が来て、帰るというのを引き留め、「たまにしか来られないし、外でも飲めないのだから、うちで飲んでいってよ」とお酒を出して泊ってもらったようなこともありました。そういうことができるのは農村だからであり、農業だからよかったということを実感できる何かができればいいなと思っています。

先ほどの中野さんのようにキャンピングトレーラーを買うとかゲストハウスを建てるということまでは、なかなか採算的にも難しいかなとの思いもあります。いくつかベースになる作物があって、それがきちんと営農していけるという前提で、別に金儲けということではなく、農業の良さを伝える方法として、何らかの加工品を作るとか、皆が集まりホームパーティーをやるとか、そんな方法でもできるのではないかと思います。そういうことを通して、本当の意味での農業や農村の良さ、心の豊かさを伝えることができれば良いなと思います。現在は個人経営体が主ですが、その経営主が怪我などで農作業ができなくなると経営は成り立たたなくなります。そんな時には、まわりの地域の人たちがカバーし合うのです。最悪の場合には、まるまる一年にわたり経営主が復帰できるまで代わりに作業して維持することもできるはずです。それが共同体としての農村の良さだろうと思うので、そういうことが自然にできる地域のコミュニティをきちんと維持することが重要であると思います。

坂　下　ありがとうございました。日本全体でコミュニティの維持が難しくなってきており、農村も「過疎だから」と言って諦めるよりは「都会の砂漠とは違うぞ」という気概を持ち、何か新しいことをやっ

ていければと思います。

今日お聞きしたところ、コロナのインパクトも一年目は相当大きかったけれど、今年は皆さん大分慣れてきているようです。人づきあいなどは、ほとんどなくなってしまいましたが、「それで楽になった」と言っているだけでいいのかなという思いを感じています。「農村での付き合い方」をこれからどのように作っていくかが、来年あたりの課題になってくるものと思います。

今年も天候や農産物需給など厳しい面はありましたが、皆さんいろいろ新しいことにもチャレンジされている状況をお聞かせいただき、大変力強く思った次第です。来年こそは、直接お会いして話し合えることを祈念し、モニター会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

坂下所長

近　藤　皆さん大変お疲れ様でした。いろいろ前向きなお話を聞かせていただき、本当にありがとうございます。

最後に、皆さんにお知らせがございます。美唄の貞広さんは、今回をもってモニター委員を退任されることになりました。最後に貞広さんよりご挨拶をいただければと思います。

貞　広　今回でモニター委員を退任しますが、これまで長い間大変お世話になりました。皆さんから興味深いお話を聞かせていただき、大変勉強になりました。皆さんには、これからも農業の明るい話題を作っていっていただきたいと思います。地域農研の皆様には、本当にこれまでお世話になりました。ありがとうございました。

近　藤　ありがとうございました。

私どもの研究所は、いかに地域の農業の振興に貢献できるかというのが第一義的な使命であります。今後とも、研究所一丸となって取り組んでいきたいと思いますので、皆様方の一層のご指導をよろしくお願い申し上げます。

以上で、本年度のモニター会議を終了させていただきます。皆さんどうもありがとうございました。